

藤沢周平と庄内

最終回(四)

「蝉しぐれ」の情景

荘銀総合研究所
研究員
佐藤 寛子

第一回の冒頭で、一年間四季を通じて庄内の姿を伝えたいと述べたが、あつという間に、約束の時間が来てしまった。
最終回である今号は、「海坂藩」のモデルとなった町、鶴岡から展望をひろげてみたいと思う。

滋味肥沃な庄内平野に包まれるようにして、鶴岡市はある。
人口は十万ほどの都市である。

城下町の名残をとどめた町は、現在でも日本の各地に残されているが、ここ鶴岡も、往事の面影を今に伝えている。

庄内、とひとくちに言っても広いが、この町は江戸時代の末期まで酒井氏の詰めが置かれていたために、政治的にその中心的な役割を担ってきた。

この「藤沢周平と庄内」の連載にあたって、筆者自身、藤沢周平の作品や歴史的文献、旅情報誌を手掛かりとしながら、たびたび庄内へ足を運んだが、鶴岡市ほど書きにくい町は無いと、正直なところ思っている。

そのようにわざわざ記するのは、自分のホームグラウンドである鶴岡に対する愛着と、歴史が語る重さおもさに対しての畏れがあるからである。

藤沢周平の書く世界に憧れて、庄内を訪れる人も多いと聞いた。
作品を読んで鶴岡を訪れる観光客のために、市内には「ここが＊＊物語の現場です」と理解を助けるための標柱があちこちに設置されているが(次頁参照)、実際に市内を歩き回ってみると、時間と作品が混然としてきて奇妙な感覚にとらわれる。

鶴岡の町のつくりは、城跡(鶴岡公園)を中心として、かつての老の邸宅や藩の重職の屋敷が取り囲み、その周囲を町人の住まいが立ち並び、町全体を覆うように寺社が配置されている。

さらには、城と外部との関所の役目を果たした「木戸」を示す石碑や、敵の襲来に備えて細工された「字」や「丁」型の小路が界限かぎりに見ることが出来る。

この形状は城下町の特徴的な構図であり、町の骨格は築城の際に形成されたと推測される。

城は戊辰の役の後、本丸と二の丸を除いて解体されてしまったが、今でも武家屋敷や大きな古い商家などが軒を並べ、その後の二回の戦争を経て、この景観は保たれている。

「蝉しぐれ」に鶴岡を照らし合わせて見ると、主人公の住む家の並びや、武道の稽古のために通う道場、藩の重職が住む広大な屋敷、その一つひとつに地名が与えられ、作品が町の景観に溶け込むように、描かれている。

そこに人々の往来の様子を見るかのようである。藤沢周平は地図を丹念に眺め、自分が暮らしをいとなんできた郷里の姿を作品の中に再現した。

致道館のこと

馬場町、鶴岡市役所の向かいにある致道館は、九代藩主忠徳ただありの時代に創設された藩校である。

「蝉しぐれ」では、学舎「三省館」として登場する。当初、致道館は日吉町に建立されたが、政教一致の方針を重んじた十代忠器ただかによって、政を司る城の真正面に移設され、藩の役所も兼ねるようになる。

創設の趣旨にかない、致道館において優秀な成績を修めた者は、藩政に参加する機会も与えられた。

考古学や物理学、動植物学に至るまで生前約七百の著書を残し、日本のレオナルド・ダ・ヴィンチと言われた松森胤保が学んだのも、ここ致道館である。



致道館の名前は「君子八学ビテ以テソノ道ヲ致ス」という論語の一節に由来し、その学派は荻生徂徠おぎゅうそらいの学を基本とする。

徂徠学は古文辞学とよばれ、解釈に頼らずに、孔子の教えを自ら読み説くとする学派である。

江戸時代、幕府は朱子学以外の学派を禁じたが、庄内藩と彦根藩のみ異例の扱いを受け、また志ある者ならば身分にとらわれず、相当の手續きを経て入学を認めたといい。

鶴岡の人の、質実剛健の気風は、こんなところから由来するのかもしれない。

講義の概略や致道館の制度が展示された講堂を右手に進むと、奥まったところに「黒田清隆」と聞き覚えのある人の名が刻まれた部屋がある。

戊辰の役の降伏に際して、庄内藩と官軍が調停を行ったのが、この一室である。

いまは静謐せいひつなこの空間で、今日の庄内を左右する会談が行なわれた。

いつしか時代の変遷に伴って致道館も廃校となり、その後庁舎として使用されたり、規模も大分縮小されたものとなるが、庄内の気風を育んできた場所として現在にいたるまで手厚く保存されている。

先頃、ここから歩いて間もない新百間堀しんひゃくけんぼりに、国内でも最先端の設備を備えた慶應義塾大学先端生命科学研究所と、東北公益文科大学鶴岡サイトが設立された。

致道館のかつての教育を思わせるかのように今日でも鶴岡には論語の素読を行う会があったり、子供たちが町の歴史を研究したりと、向学の精神はしっかりと土地に根付き、伝統と新しい文化が共存しながら、次なる時代へ伝えていくこうとする息吹がある。

鶴岡公園の東側には、内川のおだやかな流れがある。

鶴岡市は藤沢周平をはじめとして、不思議なほどに多くの文学者を輩出してきた土地であるが、高山樗牛も、田沢稲舟も、この内川に架かった三雪橋付近を生誕の場所としている。

文四郎とその初恋の人「ふく」が作中初めて言葉を交わすのもこの内川（作品では五間川）の浅瀬である。

「蝉しぐれ」はこの場所から、およそ一年にわたって郷里の山形新聞紙上に掲載された。

「末は五間川の下流に吸収されるこの流れで、組屋敷の者は物を洗い、また汲み上げた水を菜園にそそぎ、掃除に使っている。」

藤沢周平著「蝉しぐれ」

「文四郎が川べりに出ると、隣家の娘ふくが物を洗っていた。

『おはよう』

と文四郎は言った。その声でふくはちらと文四郎を振りむき、膝をのばして頭をさげたが声は出さなかった」

藤沢周平著「蝉しぐれ」



派閥抗争に巻き込まれ、非業の最期を遂げた父の死があり、出世や地位にこだわることなく交わった友の姿があり、恋と呼べないほどに儂い人の姿がある。

いつしか旅立っていく人の姿、大人になってそれぞれに家庭を持ち暮らしを営む友人たち、挫折を繰り返しながら、一人前の藩士として成長してゆく主人公の姿があり、これを単に時代小説の枠にあてはめるにはためらいがある。

作家は体制の前に無力に潰れてしまふ人々に対して、弁明することもなく、一瞬のうちに過ぎていく情景を、端正な筆致で綴る。

理不尽な、現代にも通じるかのような社会の枠組みのなかで、その叙情は、読む者へと委ねられていく。

「二人は、歩いてきた道と交叉する畑に沿う道に曲がり、幹の太い樗の下に立ちどまっていた。旧街道の跡だというその道は、樗や松の並木がすずしい影をつくり、そこにも蝉が鳴いていた」

藤沢周平著「蝉しぐれ」



光と影、そよぐ風の音、樹齡の古そうな櫛の木や、こだまする蝉の声、私たちの心に、幼い頃から焼き付いた庄内の風景が描かれている。

読む人をいつしか郷愁へ誘う気配が、そこにある。

黄金村のそばを流れる青龍寺川や致道館、馴染みの深いこの土地に、慎ましく真面目に生きてきた人の姿を見る。

いくつもの作品に描かれてきた庄内と、そこに暮らす人々の姿がある。

かつてこの風土のことを「沈潜の風」と称した人がいたが、藤沢周平が描いた世界は、まさしくこの庄内を彷彿とさせる情景であり、作品に、作家が背負う郷里の印象が溢れている。

このおだやかな時代に、私たちは先人が庄内を歩んできた苦労を、直接知ることができない。

しかし、藤沢周平の描いた「海坂藩」の町を知り、城跡や、お堀端、古い町並みを歩いていると、歴史に対する様々なおもいが浮かんでくる。

蝉しぐれの時代から、明治へ、そして平成の今日と時代は移り変わり、時間に押されるようにして、鶴岡の町並みも、社会の制度も、かつての時代とは大分違ったものに塗り替えられた。

そして、藤沢周平も戦前から戦後へと、一つの時代を生きた。

この稿を完成させるに当たっては、実に多くの方に御教示いただく機会を得た。

その際、普段は寡黙がちと言われる庄内の人々が、本当に嬉しそうに自分の暮らす町のことを語るとき、人々はいまだ城下町の誇りを持っていると感じた。

歴史に翻弄されながらも、この土地で変わらぬ生活を営んできた人々がいて、この庄内に根を張って暮らしてきた現実がある。

混迷の時代を経て、誇りを持って暮らしている人の姿や、伝統が豊かに継承されている風土に触れたとき、庄内という生命力が失われていないと思えた。

「海坂藩」という架空の町から、庄内という一つのアイデンティティーが見えた。

この町が経験してきたすべてを包み込むかのようにして、「海坂藩」の美しい町並みは、いま静けさのなかにある。

郷土を愛し、庄内の人と風土を愛した藤沢周平の文学は、これからも広く語り伝えられて欲しいと心から思う。

(完)

(写真提供・鶴岡市観光物産課)